
死神のルール～連載版～

早川 眞治

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神のルール〜連載版〜

【Nコード】

N9673B

【作者名】

早川 眞治

【あらすじ】

死神には、ルールがある。命を奪う事…そして…。

第一話：夢見

死神とは、一方的に命を奪う存在だと思われてきた。しかし、命を奪う以外にも現世へ戻すという仕事もある。

しかし、寿命の時に現世へ戻すのは、難しく　もし現世へ戻せても不自由な生活を強いられる。

そんな死神の仕事や生活のお話。

「次は、葛西勇樹：18才睡眠薬での自殺を図った」死神に名前はない。

しかし、死神は、生まれた時から死神なわけではなく。昔は、人として生き…そして、罪を犯した。死神になる人間は、無意味な殺生を行なった人間になると云われている。そして、人を殺した人間は、人を相手にする死神になる。

死神は、更正所のような意味を持つ。

そして、百人を終えると魂は、もう一度洗われ現世へ送り出されるのを待つ。

この死神も人間でいる時は、無意味な殺生を行なった。立て籠り…射殺されコチラへ運ばれてきた。

最初は、命を奪う以外しなかったが段々と救う事を覚え更正の道を進んでいる。

「生きますか？逝きますか？」死神が葛西に問いかける。

「もういい…俺は、疲れた」この葛西と云う男は、優秀な両親を持ち毎日勉強漬け。大学進学も近くなりプレッシャーをかけられていた。

「勇樹！！お前は、お父さんの会社を継ぐ人間なんだ！！」

「そうよ。勇樹今の時代は、勉強が出来ないと苦労するのよ？」俺の顔を見れば勉強だ親父の跡継ぎだ…そんなもん俺は、興味ない。

しかし、今更何が出来るわけでもない。

生まれた時から親父やお袋が敷いたレールの上を走らされている列車でしかない。

「あーもう…いいよな」そう呟き致死量まで調べた薬をさっき飲んだ。

「いいのですか？」死神の問いかけ。

「どうせ今のまま生きていたって人生面白くないしな…」生きる気力も無くした男は、がつくりとうなだれながら呟いた。

「俺…本当は、サッカー選手になりたかったんだよ…」その呟きが最後の言葉になった。

「来世では…夢を叶えられるといいね…」そして、死神は、次の人の元へ歩き出した。

第一話：夢見（後書き）

一話一話完結系なら書ける気がしまして連載スタートです。

ネタがある時に書かないと書けなくなってしまうからね（笑）

ジャンルは、ホラー！！全くホラー要素が含まれていない？ラスト

にホラー要素が含まれるかもしれないので わかりませんが（笑）

では、またお会いしましょう。（この後書きは、テイク2です）

第二話：暇

死神は、百人まであと少しと云うことに気が付いた。

そして、死に行く者がどのようにして生まれるのかを一人に対して一週間ほど観察することにした。

「今回は… 邑井ともえ… 18歳[♀]」死神は、邑井の元へ向かった。

「えつとーじゃあ邑井さん答えて」教師が黒板の前を譲る。

カツカツカカカ―

邑井が黒板にスラスラと書いていく。

「うむ。正解だ」簡単すぎて退屈な授業。塾で習っているから別に授業を受けなくてもわかるし塾の方がわかりやすくやってくれる。だから、私は、授業中適当に暇つぶしをしている。

出会い系サイト 最近バカなオッサンを捕まえた。

そいつは、会う度におこづかいをくれる。別に金に困っている訳じゃない 暇だから。

「久美ちゃん何か欲しいものないかい？」全くバカなオッサンだ。本名なんか教える気もない。

オッサンは、結婚していて子供もいるらしい。確か私よりも年上で家を出たとか云っていたな。

「別にない」いつも同じことを聞いてくる。私を娘だと思っているのか？

いつも通りつまらない学校 爆発とかしたら楽しいだろうか…。そんな事で捕まっても面白くない。私は、事件が起ることを祈った。

「久美ちゃん何か欲しいものない？」また同じ台詞。私だけ時間が輪廻しているのでは、ないかと云う錯覚に陥りそうになる。

「つまらない…」そんな台詞を吐いた所で世界が変わる訳じゃない。

「久美ちゃん何か欲しいものない？」やっぱり同じ台詞。でも少し違った。

「おい…オッサン」ガラの悪い男が四人声をかけてきた。

「なっ…なんですか？」オッサンがオドオドしながら返事する。

「俺の女に何しとん？」一人が云う。え…？誰…？私は、驚いたが展開が気になり黙っていた。

「くっ…久美ちゃん？」恐る恐るこちらを向く。

「…」私は、どんな顔をしているだろうか。驚いた顔？それともいつもの通りの顔？どうでもいい。

「おい！！こっちむけやオッサン！！」一人がオッサンに向かって云いはなつ。

「ひいっ…」逃げた…。まあ当然か 他人の為に自ら犠牲になる奴なんてテレビの中の話だし。

「大丈夫？久美ちゃん」真ん中の男が近寄ってくる。

「…」私は、久美ですらない。

「どうしたん？怖かったんか？」手を取ろうとしてきたので一步引いた。

「お前助けてやったんに逃げるんか！！」左側にいた奴が突然キレだした。

「まあまあ落ち着け。ほら脅えちゃってるじゃんか」

「久美ちゃん今からさー俺らと遊ばない？」断っても無理矢理連れていかれそうな云い方だ。どうでもイイ。

「ささっ行こうかーこの下だよ」路地裏にある階段。下は暗くてよく見えない。

「帰ります…」私は、帰ろうとするが、腕を掴まれた。

「痛っ…」

「ごめんごめん…でも、ここで帰っちゃうならもつと痛くなるよ？」
脅した。ハツタリだろう。

「…」私は、頷いて従うふりをした。逃げ出す為に
そして、階段を降りる。部屋に入ると変な臭いがした。それに、暗
くてよくわからない。

「ささつ久美ちゃん座ってー」私は、云われるがままに従う。

「久美ちゃんに飲み物出してー」誰かが飲み物を持ってきて私の前
に置いた。多分 酒だろう。

「さあさあ飲んじやつて平気ー度数は、弱いからさ」
しょうがないから飲んだ。私は、お酒強いから平気。

「あ…れ…？」軽いのに…何でか目が…。その時 部屋の灯りがつ
いた。そして、倒れる瞬間に見てしまった…。切断された人間を…。

「逝きましよう…」今回は、事故や自殺と違い 回復出来ない。死
神は、逝きましようと言った他なかった。

「待って…私は、少しだけ…」とめえは、そう云って死神から離れ
た。こう云うケースは、珍しくない。殺された人間が『まだ死んで
いない』と云ってその場に残る。今回は、死んだ事を認めながらも
残るようだった。

少しだけ気になったのは、とめえが死神から離れる時の目が…。

「次に行かないと」死神は、そう呟き新たな死者の元へと向かった。

第二話：暇（後書き）

支離滅裂。日にちをあけて書いてますので設定も忘れてしまいます。文章が変なのは、ご愛嬌と云う事には、なりませんか？…ならないですよね（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9673b/>

死神のルール～連載版～

2010年10月11日01時40分発行